

## フランシスコ・スアレスと諸天使の種別化

——トマス説に対する或るイエズス会士の立場——

石田 隆 太

### 一・序

西洋中世および近世のスコラ学者たちは、主として神学的な動機から天使という特殊な霊的存在者に関して様々な議論を展開した。文字通りには神の使いとされる天使は、芸術家たちにとつては絵画や彫刻の題材であつたのに対して、スコラ学者たちにとつては学問的探究の対象であつた。その結果、天使論という固有な議論領域が構成されるに至る。例えば、天使博士の異名を持つトマス・アキナスの『神学大全』では、次のような仕方で天使論のプログラムが示されている。

さて諸天使をめぐつては、次のことが考察されるべきである。第一に諸天使の実体に属することごとについて。第二に諸天使の知性に属することごとについて。第三に

諸天使の意志に属することごとについて。第四に諸天使の創造に属することごとについて。<sup>①</sup>

これら四つの内の一番目に属する或る問題、すなわち諸天使の実体的および本質的側面に関する或る問題を主題的に取りあげることにはしたい。それは諸天使の区別に関する問題であり、単純化するなら、多数存在する天使にあつて種 (species) は一つであるのかそれとも複数あるのかという問題である。この問題を「天使の種問題」と呼ぶことにしよう。事柄として天使の種問題は、天使に興味のない多くの人を最初から拒んでしまうものに見える。しかしながら興味深いことに、この問題に対する解答の手法に注目することで、スコラ学者たちによる探求の方法論について考えることができる。以下で見るように、われわれの主役であるスアレスは、天使論に対する或る一定の態度に基づいて天使の種問題にアプローチしていることがわかる。

次に、天使の種問題を論じるにあたり、近世のスコラ学者フランシスコ・スアレスに注目する理由を二つ述べることにしよう。第一には、このイエズス会士が天使の種問題について体系的に論じている『諸天使について』(De angelis<sup>2</sup>)が未だスコラ学研究の本格的な分析対象とされていないからである。スアレスの主要著作としては、神学の分野においてはトマス・アクィナスの『神学大全』第三部に対する註解が、哲学の分野においては『形而上学討論集』が、そして法学の分野においては『諸法について』(De legibus<sup>3</sup>)がよく知られている。しかし死後出版(一六二〇年)であり未完であった『諸天使について』にはそれほど知名度はない。また近年スアレスの哲学的思想に関する研究は出版が盛んではあるものの、『諸天使について』が主要な分析対象として取りあげられることはほとんどない。例外はホセ・ペレイラによる研究であるが、ペレイラは天使論について論じるために『諸天使について』を参照しているわけではないため、天使論に注目するという正当な目的によって『諸天使について』を参照することが求められる。その意味でも、『諸天使について』の分析はこれからのスアレス研究に大きく貢献する可能性を秘めている。

第二には、より重要なこととして、スアレスが『諸天使について』において天使の種問題に対して提示する解答が思想

史的に興味深いからである。天使論の通史を描いた数少ない研究者の一人レンツォ・ラヴァトーリは、『諸天使について』におけるスアレスを次のように評価する。「スアレスは、トマスのな立場とスコトゥスのな立場の間にいることを試みているが、それでもやはり後者を様々な点において特権化している」。ラヴァトーリによればスアレスは、純粋な靈性および不可滅性、知性的能力や意志に関しては天使博士の教説に忠実であるのに対して、諸天使が罪を犯しうる自由を強調することや諸天使における同一種の可能性を認めることに関しては精妙博士の側にいる。すなわち天使の種問題に関しては、「スコトゥスが主張していたように、多くの様々な天使が同一種の内にあるということ」をスアレスは認めている<sup>4</sup>。というのがラヴァトーリの評価である。この見解は基本的に適切なものであるが、実際の状況はもう少し込み入っている。スアレスの専門家である田口啓子がより厳密に述べているように、スアレスは、諸天使の種別化に関してはトマスの側に立つ一方で、或る同一種における諸天使の多数化が可能であるかに関してはトマス及びトマス学派と意見を異にする<sup>5</sup>。それゆえ、天使の種問題をスアレスにおいて論じるためには、諸天使の種別化という観点と同一種における諸天使の多数化という二つの観点を考慮する必要がある。

最後に、天使の種問題に関して最低限共有すべき歴史

な展開を簡潔に示すことにしよう。トマスは、天使の種問題に關しては天使の種が複数あることを主張しており、しかもより厳密には、各天使がそれぞれ一つの種でもあるといういわば「天使における種の個体説」とでも言うべき主張を保持していた<sup>(10)</sup>。それに対してスコトゥスは、主としてガンのヘンリクスからの影響を受けて、同一種における諸天使の多数化が可能であることを主張していた<sup>(11)</sup>。トマスの死後、天使における種の個体説は、諸天使における種の同一性の可能性が否定されるという点において神の全能性に抵触することから、パリ司教エティエンヌ・タンピエによる一二七七年の禁令によつて危険視された。ヘンリクスやスコトゥスはその影響下にいる<sup>(12)</sup>。それから三世紀以上の時が過ぎてもなお、スアレスが天使の種問題を論じるにあつたたびたび神の全能性を考慮していることが窺える。それでもスアレスが、諸天使の種別化そのものを認めるという点においてトマス説に多少の配慮を見せるのは、やはりトマスの権威があつたことだろう。一三三三年にトマスがカトリック教会の聖人になつたことに加えて、イエズス会におけるトマスの権威がそのような配慮をスアレスにさせたことの外的要因として考えられる。トマスの権威は特にイエズス会の教育プログラムにおいて顯著である<sup>(13)</sup>。

以上を踏まえて本稿では、天使の種問題に關するスアレ

の立場を、トマス説との相異に注目しながら辿ることにした。この問題においてトマス説はスアレスにとつて重要な試金石だからである。

## 二・『諸天使について』第一卷第二章

### (一) 可能性の拡張

『諸天使について』第一卷第二章では「あらゆる天使が同じ種の本性に属するののか、それとも諸天使の間には本質的区別が見出されるのか」(四九<sup>a</sup>)が問題とされる。すなわち、諸天使がすべて種的に同一であるのか、それとも諸天使の間には本質的に異なる種があるのかが問われている。

スアレスは三通りの仕方で解答を提示しているが、第一には次の通りである(五〇<sup>a</sup> b)。

何はともあれ第一に言われるべきは、神によつて諸天使は種において相異なるものとして創造されえたということである(五〇<sup>a</sup>)。

可能性の次元において、つまりは神の全能性を特に考慮してスコトゥスがかつて諸天使の種における同一性を認めたのに対して、スアレスは同じく可能性の次元において諸天使の種

別化を認める（「種において相異なるものとして創造されえた」）。後で見ると、スアレスは同一種における諸天使の多数化を可能性の次元でも事実の次元でも認めているので、ここでスアレスはトマス説と全く同じように強い意味で「天使における種の個体説」を認めているわけではない。別の言い方をするなら、スアレスがトマス説を採用するとすればそれは、天使の種別化はたしかに見出されるが、それだけでなく同一種における諸天使の多数化も認められるという弱い意味でのトマス説でしかありえない。そしてもしトマス説とスコトゥス説の折衷を図るとするなら、そのようにしてトマス説を「改善」という選択肢しかない。このようにして、神の全能性という観点から拡張された可能性の範囲内に諸天使の種別化が位置づけられている。

## (二) トマスとスコトゥスの折衷

スアレスによる第二の解答は主として権威を持ち出すものであるが、そこでは驚くべきことにトマスとスコトゥスの名が同時に並べられている。

第二に私は言う。天使の位階においては、種および本質という点で実体的に相異なる複数の霊が見出されることの方が遙かによりもつともらしいことである。そのよう

に聖トマスは自らの学派の人々すべてとともに教えているのであるし、アレンシス「すなわちハレのアレクサンデル」、<sup>15</sup>「ドゥンス・」スコトゥス、エギディウス「・ロマヌス」や他の人々もそうである（五〇b）。

ハレのアレクサンデル<sup>15</sup>とエギディウス・ロマヌスの名がここに並べられているのは十分に予想できることである。両者とも諸天使の種別化に同意するスコラ学者として知られているからである。ここでさらにスコトゥスの名も並べられていることから、やはりスアレスにとつては目下のところトマス説とスコトゥス説の間に何の隔たりもなかったことが窺える。すなわち、天使の種問題におけるトマスの立場とスコトゥスの立場の対立がここではそもそも前提とされていない。こうした事態が成立するためには、やはりスアレスが既に弱い意味でのトマス説に同意していることを前提するしかない。

## (三) トマス説の擁護

最後に、スアレスによる第三の解答は、トマス説の主要部分を擁護するものである。事実一六二〇年に刊行されたリヨン版では、スアレスが述べる論拠に対応するトマスの原典での箇所が明記されているほどである（三八a）。ここで議論

の対象となるトマス説の主要部分とは、宇宙ないし世界の完全性をより高い状態に保つために天使の種別化が求められるという要請のことである。トマスの言い方を借りるなら、宇宙の秩序 (*ordo universi*)<sup>17)</sup> に基づく議論である。

遂には、諸天使間のこうした本質的多様性の可能性が想定されるなら、諸天使が諸々の種の大きな多様性において創造されていたということの方が、宇宙の美しさにとって、かくしてまた神の知恵の秩序にとって遥かに相応しいことである (五一 a)。

この後でスアレスは、トマス説の擁護を四通りの仕方で開催する (五一 a)。第一に言われるのは、一つの種の下に諸個体が区別されるのみの場合よりも、多数の種が区別されることの方が秩序のあり方としてはより先行しているがゆえに、被造物の中で最上位にいる諸天使にもそうした種別化が見出される方がよいということである。一六二〇年版では、この論拠に対応する箇所としてトマスの『対異教徒大全』第二巻第九三章が参照されている (二三八 a)。第二に言われるのは、諸天使の種別化は神の知恵、善性、権能の素晴らしさを表現しているということである。一六二〇年版では、トマスの『定期討論集 神の能力について』第六問題第六項主文末

尾が参照されている (同)。第三には、人間と他の動物の間に無数の種が見出されるのと同様にして、神と人間の間にいる諸天使においても多数の種の本性が見出されるはずだということが言われる。そして最後に第四には、諸天体や星々 (*sidera*) において種の多様性が見出されるということから、アナロジにより、諸天体よりも上位の諸天使においても種の多様性が見出されるべきだとされる。天体からのアナロジを用いるこの論法は、トマスの著作において多数散見されるものでもある。彼の主要著作に限っても、『命題集註解』(第二巻第三区分第一問題第四項)、『対異教徒大全』(第二巻第九三章)、『神学大全』(第一部第五〇問題第四項) のすべてにこのアナロジを見出すことができる。

#### 四 「キリスト教神学」の範疇としての天使論

これまでの論述においてスアレスは、諸天使の種別化に対して、そして(弱い意味での)トマス説に対して肯定的である。ただし以上で見た三通りの解答がすべて、諸天使の種別化が「ありえたこと」(*potuisse*)、「よりもっともらしいこと」(*probabilius*)、<sup>18)</sup>「相応しいこと」(*consequentaneum*)<sup>19)</sup>と言われていたことに注意する必要がある。スアレスは、諸天使の種別化を事実として記述することに対して慎重である。ここからわれわれは、スアレスが天使論をどのような方法論によつ

て論じているのかという論点に導かれる。

この点については、『諸天使について』の冒頭に付されている「読者への前書き」(*Proemium ad lectorem*)を参照するのが有用である。「諸天使ないし諸々の霊的被造物に関する論考全体への序曲」(*Tractatus universi de Angelis, seu de spiritualibus creaturis, preulium*)と題された節でスアレスは、自然神学(あるいは哲学、形而上学)とキリスト教神学(*Theologia Christiana*)が天使を論じる質的差異について言及する(*xii-xiii*)。スアレスによれば、天使という非物理的な事物について論究することは自然神学の領分でもあるが、天体の運動との関わりでは自然哲学者の領分ともされる。このような限りでは、アリストテレスを始めとして、アリストテレスの註解者たち、さらにはプラトンも天使について論究してきたし、そうした哲学的な成果はトマス・アクィナス、マルシリオ・フィチーノ、アウグスティヌス・エウグビヌス(アゴスティーン・ステウコ)によつて伝えられてきた。この歴史的叙述からは、プラトンとアリストテレスの両方が介在しているのみならず、イタリヤ・ルネサンスの蓄積も反映されていることが窺える。ステウコによつてまさに確立された永遠哲学(*philosophia perennis*)の範疇に天使論を位置づけることも可能だろう<sup>(9)</sup>。その上でスアレスは、『形而上学討論集』第三五討論においても自然世界の諸結果ないし諸原

理に基づいて天使の本性を可能な限りで探究していたことに言及しつつ、『諸天使について』では「より高次の仕方で」同じことを確認し、さらには「自然理性が追いつかないことごと」を付け加えることを宣言する。

次に、『諸天使について』における探究の態度を簡潔に示す次の箇所が続くことになる。

キリスト教神学は、より高次の光の下で、そして神から啓示された諸原理に基づいて、当該の諸実体「すなわち天使」について討論する(*xv*)。

自然神学でも扱われてきた天使は、より上位のキリスト教神学の観点から捉え直されることにより、さらなる論究の対象となる。啓示に基づくという、天使によりふさわしい方法論への意識化を図る中で、卓越博士の筆致もそれに応じたものにならざるをえない。「ありえたこと」、「よりもつともらしいこと」、「相応しいこと」という三つの文言からはそうしたスアレスの探究態度を窺うことができる<sup>(10)</sup>。

### 三、『諸天使について』第一巻第五章

#### (一) 絶対的力能に基づくトマス説の擁護

『諸天使について』第一巻を締めくくる第五章では「個々の秩序に属するあらゆる天使は種において異なるのか、それとも或る天使たちはただ数においてのみ異なるものとして与えられるのか」(六七b)が問題とされる。第二章および第四章で三つのヒエラルキアと九つの階層というキリスト教の伝統的な天使の位階構造について議論した上で、スアレスはここで改めて天使の種問題を正面から取りあげている。ここでの主眼は、同一種における諸天使の多数化という事態をあらゆる観点から擁護することにある。トマス説との距離を本格的に広げる箇所でもある。そしてこの章においてスアレスははじめて、天使の種問題を可能問題 (*questio de possibili*) と事実問題 (*questio de facto*) という軸によって分析していく。

可能問題の側にあるのは神の全能性に関わる問題であり、ここでは神における絶対的力能と秩序づけられた力能という区別に基づいて議論が進められる。神の絶対的力能によれば、神は矛盾を含むこと以外は何でも行うことができる。それに対して神の秩序づけられた力能とは、あくまで既存の秩序ないし所与の自然世界の中で、神が一定の法則に即して自

由に行うことのできる能力を意味する。<sup>21)</sup>

可能問題に関してスアレスはまず、絶対的力能に関する以下の問題を切り分ける(六七b~六九a)。

第一「の問題」は、神は自らの絶対的力能に基づいて、同じ種に属するただ数によってのみ区別された二ないし複数の天使を産出することができたか否かである(六七b)。

この第一の問題においては、諸天使において種が同一であることの可能性を否定する人々としてトマス学派が名指され、彼らは自らの立場の根拠をトマスの諸著作に見出していると言われる。それに対してスアレスは、まずは自らの立場として、神の絶対的力能に基づく限り、諸天使において種が同一でありうることを明言する。このような見解がスコトゥスや他のスコラ学者たちの立場と同様であることに言及しつつ、実はトマス解釈の一つの道でもあることを示唆する。「皆も言及している箇所」だと断った上で、スアレスはトマスの『知性の一性について』の或る箇所を参照する。トマスによるこの小さな論争的著作は全人類に知性は一つしかないとするアヴェロエス主義を批判するためのものであったが、スアレスは次の言明を引用している。

「アヴェロエス主義者たちは」同じ種に属する多数の知性があるということは矛盾を内包していると感じていたので、そうしたことを神はなしえないということを示すために甚だ粗野な仕方でも議論が進められている」(六八b)。

この箇所においてスアレスは、神の全能性に関するトマスの考えに注目する。まずトマスは、同じ種に属する多数の知性を神が造りえないということが偽であると考えているはずである。それゆえトマスは、同一種に多数の知性が存在することは矛盾を内包しておらず、それが神の絶対的力能の対象でもあることには同意していたとスアレスは評価する。ここで知性と言われているものは、トマスのテクスト本来の文脈では人間知性のことではあるが、人間よりも高度な知性体である天使の知性をも意味するという読み替えにスアレスは与している。このようにしてスアレスは、神の絶対的力能に関する限り、解釈如何によってはトマスを擁護する可能性があることを示している。

## (二) 秩序づけられた力能に基づく解答・分岐点

第二の問題は秩序づけられた力能に関わる(六九b)〜七三

a)。

第二の論点は、秩序に属する法に即して、あるいは秩序づけられた力能に基づいて、あるいは諸事物にとつて親和的な(consuetudinis)<sup>24</sup>秩序に即して、諸天使が同じ最終的な「それ以上分割できない」種の下で数に即して多数化されることが可能であるのか否かである(六九b)。

この第二の問題においてはまず始めに、神の秩序づけられた力能に基づいては諸天使が同一種に属することが不可能であるという考えがトマスに帰されている。ここでも典拠として『知性の一性について』の或る箇所が引用されている。スアレス自身が引用している言明は次の通りである(なお、分離実体とは質料から離在している存在者のことであり、ここでは天使を意味する)。

「諸々の分離実体は、自らの本性において「教的」区別の原因を持たないし、「同一種における」多数化の自然な成り行きも持たないが、それでも超自然的原因からは多数化を獲得することがありうるだろうし、また「そのことについて」矛盾の内包はなかったであろう」(六九b)。

ここでスアレスはトマスの考えとして、この世界の本性的なあり方においては同一種における諸天使の多数化は不可能であり、それがありうるとしたら神の絶対的力能に基づく超自然的な次元でのみだという内容を理解している。この文脈でトマスが秩序づけられた力能に関して十分には語っていないことをスアレスも認めるものの、同一種において多数化される本性的な原因を天使が持たないという考えをスアレスはトマスに帰している。

この第二の問題を解決する中で、天使の種問題に対するアプローチに関わるものとして、可能問題と事実問題という二つの枠組みが登場する(七〇a)。<sup>25</sup> スアレスによれば、複数の天使が同じ種に属するのかどうかを探索することは事実問題であるのに対して、神が諸天使の創造を意志するののかどうかを探索することは可能問題に属する。それゆえスアレスは、秩序づけられた力能に基づいて天使の種問題を議論する場合には神による創造への意志が考慮されるため、この場合にも可能問題の一つとして解答を行う。そして最終的に、諸天使が同一種において数的に多数化されることが神の絶対的力能に関してのみならず秩序づけられた力能に関しても可能であると結論づける(七二b~七三a)。このようにしてスアレスは、神の秩序づけられた力能に関して、天使の種問題

に関するトマス説から距離を置き始める。すなわち、やはり弱い意味でのトマス説を受容することしかスアレスには認められていないことがわかる。

### (三) 事実問題としての諸天使の区別

いよいよ事実問題に関するスアレスの立場を見ることにしよう。問題の定式化は次の通りである。

第三の論点は、次のことが事実についてどう考えられるべきかである。すなわち神は、複数の天使を、それらの諸々の最終的な種の下で、数においてのみ相異なるものとして創造したのか、それとも反対にたった一つの天使としてのみ創造したのか(七三a)。

ここでスアレスは、諸天使が或る種の下で多数化されたものとして創造されたのか、それとも一つの種につき一つの天使が割り当てられるように創造されたのかを事実問題として提起している。スアレスによれば、前者をトマスは至る所で否定しており、トマス学派の人々も同様である(七三a)。こゝでもやはりスアレスは、トマスと袂を分かつことを選んで

いる。この事実問題に対するスアレスの解答は次の通りである。

疑いの余地があり確実ではない事柄においてのことであるが、諸天使のあらゆる種ないし複数の種にあっては数においてのみ相異なる複数の天使が創造されていたというの方がより信じられうる (credibilis)<sup>(26)</sup> と思われる (七三 b)。

語り口は慎重であるものの、スアレスは同一種における諸天使の多数化を認める。そしてこのような見解を表明しているスコラ学者の一人として、スコトゥスの名が挙げられている。天使の問題に関してスアレスは一貫してスコトゥスの権威を認めていることになる。さらに言うなら、ハレのアレクサンデル、アルベルトウス・マグヌス、ボナヴェントゥラなどトマス以外の主要なスコラ学者の名もここでは列挙されている (七三 b)。このことは、それだけスアレスがトマスと袂を分かつたことを選んでいることをより強く意味している。

事実問題においてもスアレスは、単なる事実を記述するのではない仕方では天使について語っているが、まさにそれゆえに、複数の理由づけを六つ提示する (七三 b ~ 七四 a)。第一は教父たちの権威に訴えるものであり、第二から第六の理由は適合性 (congruitas) に基づいている。適合性に基づく

議論は、何らかの状況を想定した場合に、同一種の中に多数の天使が存在することが何か他の事柄と適合的な仕方では理解できることを示すものである。実際、第二の理由として挙げられているのは、或る一つの種に多数の個体が属していることも宇宙の完全性や美しさに貢献するということである。というのもスアレスによれば、宇宙の完全性や美しさはあらゆるものの多様性に由来するのであり、種は一つであっても多数の個体が様々な仕方では区別されることはこうした多様性に属することだからである。

第三と第四の理由では社会的な次元に言及がある。第三の理由は政治 (学) 的な (politica) 理由に基づくものである。ここでは宮廷政治に例がとられる。元首の宮廷においてはあらゆる位の廷臣たちが平等な状態で多数いる方がよく、その方がより適度な均衡状態で廷臣たちが同じ職務に従事することができる。スアレスは言う。第四の理由は、友愛および連帯 (societas) が完全であるためには同じ段階ないし秩序の中に連帯する仲間がいる方がよいということである。この理由によれば、もし天使の多数性が或る一つの「共和国」(res publica) ないし連帯のあり方に従うなら、個々の天使は種の本性において完全に類似する仲間を持つことが最も適切なことだとされる。このような議論からは、天使論が単に思弁の極致にある観想的な学問の側面しか持たないのではな

くて、政治（学）に関わる限りでは実践的な学問の側面を持つことが窺える。

第五と第六の理由ではより神学的な次元に至る。第五の理由は、至福者たちの中で恩寵や至福直観の度合いにおける同等性が見出されることを根拠にしている。そして最後に第六の理由は、或る一つの種に属する特定の天使が断罪される場合に、その種の成員に欠員が出てはいけないことが根拠とされる。仮に天使における種の個体説を全般的に採用すると、天使の或る種においては欠員が出る可能性を認めてしまうこととなることが危惧されている。このようにしてスアレスは、同一種における諸天使の多数化を肯定する立場を詳細に表明し、強い意味でのトマス説に与しないことを明確に示している。

#### 四・結

簡潔に総括するなら、スアレスは、諸天使の種別化については弱い意味でのトマス説に同意する一方で、同一種における諸天使の多数化については、絶対的力が関わる次元を除いて、可能問題の側からも事実問題の側からもトマスと立場を異にする。諸天使の区別というスコラ的な議論においてスアレスがスコトゥス説とトマス説を折衷していると言えるの

は、トマス説を弱い意味でのみ採用する限りでのことである。その一方で、スコトゥス説に対しては特に異論が唱えられることはなく、スコトゥスの原典にまで遡って議論が展開されることもなかった。このことは、スアレスがスコトゥスの権威を素直に認めていたということ以上に、逆にスアレスはトマス説に対してはどこまでが受け容れ可能でありどこからは受け容れ不可能であるかを吟味する必要があったことを意味する。トマス説はスアレスにとつて重要な試金石であった。この点を諸天使の区別という問題に関して示したことを一つの主要な成果としたい。

それに加えて改めて見るべきは、『諸天使について』第一巻の終わりに至つて、可能問題と事実問題という二つの観点から天使の種問題を捉え直すことにより、スアレスが天使論の探究方法を複層化させていることである。第二節の（四）で述べたように、スアレスは、天使に関する議論を行う探究者がどのようなアプローチから探究を行っているのかということに敏感であった。本稿で扱った範囲に限るなら、諸天使の区別という思弁的事柄を議論する際に問われる「確実性」に敏感であった。この点は最終的には、天使論という学問的探究全般に関わってくる。スアレスの『諸天使について』は、天使論における個々のトピックに注目する場合にのみ役立つだけではない。天使論という議論領域を通じた知的探究その

もの意義を問いかける必要性を投げかけてくれる。この観点からも、『諸天使について』に注目することの重要性を指摘することができる<sup>(20)</sup>。

## 注

- (1) トマス・アクィナス、『神学大全』、第一部第五〇問題序。引用および参照を行ったトマスの著作の校訂版は『Corpus Thomisticum (<http://www.corpus Thomisticum.org/people/ihml>)』で最良の版として列挙されているものを使用した。また、一次文献からの引用文はすべて拙訳であり、「」は訳者による補いである。
- (2) スアレスの死後まもなく出版された一六二〇年のリヨン版によれば、正式なタイトルは次の通り：『あらゆる事物の創造者たる神に関する「トマス・アクィナスの」『神学大全』「第一部」の第二部分、それは三つの主要な論考に配分されており、それらの内の第一の論考、諸天使について』(*Pars secunda Summae Theologiae de Deo rerum omnium Creator. In tres praecipuos tractatus distributa, Quorum Primus De Angelis*)。『諸天使について』のテクニクとしては、リヨン版を参照しつつ、主として次のヴァイエス版を使用した：R. P. Francis Suarez *Opera omnia*, Tom. 2, Vives, 1856。
- (3) 『諸法について』の正式なタイトルとしては、一六二二年のロンドン版における次のものが知られている：『十巻に配分された諸法』(立法者たる神についての論考) (*Tractatus de legibus, ac Deo legislatore. In decem Libros distributus*)。
- (4) 最近に限って次の通り：V.M.Salas & R.L.Fastiggi (eds.), *A Companion to Francisco Suarez*, Brill, 2015; J.L.Fink (ed.), *Suarez on Aristotelian Causality*, Brill, 2015; L.Novák (ed.), *Suarez's Metaphysics in Its Historical and Systematic Context*, De Gruyter, 2014。
- (5) J.Pereira, *Suarez: Between Scholasticism & Modernity*, Marquette UP, 2006, 18-20, 31-35, 202-7, 209-11, 218-19, 234-36, 239-42。
- (6) スアレスの『諸天使について』を取りあげる他の天使論の通史は次の通り：フィリップ・フォール、『天使とはなにか』、片木智年訳、せりか書房、一九九五年、八〇頁；G.Tarard, *Die Engel*, Herder, 1968, 77-78。
- (7) R.Lavatori, *Gli angeli. Storia e pensiero*, Marietti, 1991, 178。
- (8) Lavatori, *Gli angeli*, 178。
- (9) 田口啓子、『スアレス形而上学の研究』、南窓社、一九七七年、一九七頁。なお本論において「種別化」という語は、或るものが存在論的な観点で(あるいは実在において)実際に種的に区別されていることを指す。
- (10) 石田隆太、『トマス・アクィナスと天使の個体化——個体化の原理の射程をめぐって』、『中世思想研究』、第五九号、二〇一七年、三一〜四五頁；S.Th.Bonino, *Les anges et les démons: Quatorze leçons de théologie catholique*, Parole et Silence, 2007, 127-29; T.Suarez-Nani, *Les anges et la philosophie: Subjectivité et jonction cosmologique des substances séparées à la fin du XIII<sup>e</sup> siècle*, Vrin, 2002, 39-50。なお「種の個体説」という名称そのものは、生物学の哲学におけるマイケル・キセリンらの議論から借用しているが、あくまで形式的な名称の適用でもなく断つておく。 Cf. M.T.Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, SUNY Press, 1997。
- (11) O.Bouhouis, *Lire le principe d'individuation de Duns Scot*, Vrin, 2014, 163-82; G.Pini, "The Individuation of Angels from Bonaventure to Duns Scotus," T.Hoffmann (ed.), *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, Brill, 2012, 79-115。
- (12) Pini, "The Individuation of Angels," 94-99。
- (13) 桑原直己、『キリシタン時代とイエズス会教育——アレックスandro

- ヴァリニャーノの旅路」、知泉書館、二〇一七年、三五～六一頁・石田治頼、『イエズス会学事規程』にみる教育とハビトゥス形成』、『日本の教育史学』、第五七号、二〇一四年、九七～一〇九頁。
- (14) 全体を通じて、断りのない限り、ペーシ教のみによる参照は基本的にヴィヴェス版に基づく。
- (15) 厳密には『神学大全』の著者として名指される限りでのアレクサンデルを指す。アレクサンデルに帰される『神学大全』の著者性については例えば次を見よ：Ch. Beiling, "The Idea of Limbo in Alexander of Hales and Bonaventure," *Franciscan Studies* 57 (1999): 5-6.
- (16) アレクサンデルに帰される『神学大全』の中では、第二巻第一部第二探求第二論考第一問題第五ノ章第一項を見よ。エギディウス・ロマヌスについては次を見よ：T. Suarez-Nani, *Connaissance et langage des anges selon Thomas d'Aquin et Gilles de Rome*, Vrin, 2002, 80-81.
- (17) トマス・アキナス、『定期討論集 霊的被造物について』第八項、主文。この箇所では他に、実体の条件 (*condictio substantiae*) と本性の完全性 (*perfectio naturae*) が天使における種の個体説を主張する主要な論拠として取りあげられている。
- (18) ステウロの永遠哲学については次を見よ：Ch. B. Schmitt, "Perennial Philosophy: From Agostino Steuco to Leibniz," *Journal of the History of Ideas* 27.4 (1966): 505-32. また永遠哲学と天使論の関わりについては次を見よ：W. Schmidt-Biggemann, *Philosophia perennis: Historical Outlines of Western Spirituality in Ancient, Medieval and Early Modern Thought*, Springer, 2004, 280-83.
- (19) 哲学と神学の間で揺れるストアレスの姿は、人間の魂の不死に関しても見られる：田口啓子、『靈魂不死の論証をめぐって—F・ストアレスの人間観についての覚え書(その三)—』、『清泉女子大学紀要』第三五号、一九八七年、四三～五五頁。
- (20) こうした位階構造の体系化は主に偽ディオニュシオス・アレオパギテスとグレゴリウス二世に由来する：Lavatori, *Gli angeli*, 102-8.
- (21) W.J. Courtney, *Capacity and Volition: A History of the Distinction of Absolute and Ordained Power*, Peritigi Lubrina Editore, 1990.
- (22) Ade Libera, *Lumière de l'intellect: Commentaire du De unitate intellectus contra averroistas de Thomas d'Aquin*, Vrin, 2004, 13-36.
- (23) Pini, "The Individuation of Angels," 89-90n27.
- (24) 《*comnaturalis*》の意味については次を見よ：桑原直司、『トマス・アキナスにおける「愛」と「正義」』、知泉書館、二〇〇五年、一一五～一八頁。トマス・アキナスにおける親和的認識について、『哲学・思想論集』第二五号、二〇〇〇年、五一頁。
- (25) 同様の枠組みはオッカムの原罪論においても見られる：オッカム、『七巻本自由討論集』第三巻、第十問題。オッカムにおける《*de facto*》と《*de possibili*》の内、神の絶対的力を考慮する後者の側面はストアレスと共通している。Cf. 辻内宣博、『神の自由意志の絶対性—オッカムのウィリアムにおける原罪論から』、『中世思想研究』第六一号、二〇一九年、一一二～一八頁。P. Vignaux, *Justification et prédestination au XIV<sup>e</sup> siècle: Duns Scot, Pierre d'Auriale, Guillaume d'Ocram, Gégroire de Rimini*, Vrin, 1981, 106-7; L. Baudry, *Lexique philosophique de Guillaume d'Ockham: Etude des notions fondamentales*, Leihellex, 1958, 195; L.E.M. Buytaert, "The Immaculate Conception in the Writings of Ockham," *Franciscan Studies* 10.2 (1950): 153-54.
- (26) ヴィヴェス版ではおそらく誤植により《*Incredibilis*》と真逆の意味になっているが、リヨン版(五三a)に従って《*credibilis*》と読む。ヴィヴェス版の誤植については、『諸法について』の抄訳を公刊している山辺建も言及している：フランシスコ・ストアレス、『法律についての、そして立法者たる神についての論究』、山辺建訳

上智大学中世思想研究所Ⅱ編訳・監修、『中世思想原典集成二〇  
近世のスコラ学』、平凡社、二〇〇〇年、六九四頁。

(27)

同じ傾向は既にボナヴェントゥラにも見られる。詳しくは次を見  
よ。石田隆太、「トマス・アクイナス『定期討論集』 霊的被造物  
について』第八項試訳、『宗教学・比較思想学論集』、第一八号、  
二〇一七年、九七〜九八頁、註二六。

(28)

本稿は、JSPS科研費一七J〇〇一三六および一八K一二一九一  
の助成を受けたものである。また、慶應義塾大学の小沢隆之から  
草稿に対する有益な助言を得たことに対して感謝したい。

(いしだ・りゅうた 日本学術振興会特別研究員PD／

慶應義塾大学文学部)